卒業論文「団塊世代の専業主婦の活路」と私

生涯教育専攻４回生　山下 惠子

私は２００４年４月８日天理大学の科目等履修生となった。大学の教室で現役の大学生の皆さんと机を並べ、生涯教育に関する履修をスタートしたのである。以後４年間同じような形態で学んだ後、思い切ってというか必然的に編入試験を受け、２００８年４月１日に人間学部人間関係学科生涯教育専攻３年次編入が許可された。大学生になったのである。以後の２年間はあっという間に過ぎ、今となってはもっと貪欲に講義を受けてもよかったのになどと、主婦としての立場を優先して、せっかくの大学生活を軽く考えていたことに少々の悔いが残るのではあるが、まあ無理をしなかったことがよかったと自分自身を納得させておくことにする。

とにかく楽しくてオモシロイ学生生活であった。私のやりたかったことはこれだったんだ！“いつかはクラウン”というトヨタの昔のコマーシャルをもじって、私も“いつかは大学生”という思いを持ち続け忘れることはなかった。チャンスを窺っていた私に、少々遅いとは分かっているがやっと巡ってきた夢の実現である。夢は叶うものもあるのだと実感した。夢を叶えてくださった天理大学、特に生涯教育専攻の先生方には感謝の気持ちでいっぱいである。

せっかくの学生生活の中でおおいに残念なのは、先生方の講義を聞いているときは誰よりもよく解っているような気になって、真剣に取り組んでいたつもりなのに、肝心なことをすぐ忘れてしまったことが幾たびもあったということである。それは経験からのみ導かれる結論であっても軽はずみに納得してしまう私の癖が災いしていたということも一因ではあるが、なにより脳の老化現象に愕然とさせられ、「私って、こんなに頭悪かったのかトホホ！」と今さら自覚させられ現実を突きつけられたことである。

しかし、一日一つでも頭に残り心に浸みることがあったときの感動は心の底からの喜びであった。そのきっかけから興味が沸き、探求し、人に語り、繋がりを広め、心豊かに生きていくための指針を与えて頂いたのである。つまり、知らないことばかりだったのに知っていると勘違いしていたことがいっぱいあって、吸収する能力が不足していて身の程を知ったということでもある。

だからこそ、これからもずっと学習することを怠ってはいけないと痛感するに至ったのである。こんな進歩と充実感を味わうことができた私は幸せである。重ねて、諸先生方にお礼を申しあげたい。ありがとうございます。

さて、区切りの集大成である卒業論文のテーマを何にするか。生涯教育という幅広い分野のどの部分をピックアップすると私らしいのかを思案することから始まった。生きがいかな、旅かな、趣味かな、女性学級かな、公民館活動かな、伝統行事かな、いや高齢者問

題でしょう！などと具体的な方向を決めるのにいろいろ迷ったけれど、やはり今の自分を記すことこそが生涯学習そのものであると原点に戻り、その対象として私を含むある短大の専攻クラス会を事例として取り上げることにした。

私たちはいわゆる団塊の世代である。そして専業主婦率が一番高い世代でもある。そのことから、団塊の世代と専業主婦という二つのキーワードを繙くことを試みた。昭和２２年～２４年に生まれた現存者約６８０万人は総人口の約５％を占め、その人数の多さゆえに、ともすれば社会のお荷物や諸悪の根源であるかのように揶揄され疎まれがちである。しかし、そのような存在で終わらないためにも団塊の世代自身が今後をどのように生き、どんな生きがいを見つけ出していこうとしているのか、節目に臨していると考えるべきであろう。特に専業主婦にスポットを当てることで、その活路を見極める手立てとした。

関連した著書を探すことと並行して、クラス会（ろくまる会）のメンバーに協力を依頼したところ快諾を得て簡単なアンケートを実施することからスタートした。次にそのうちの５人をピックアップしてグループインタビューを行うことで全体を把握し、対面と電話で個別に生きざまを語ってもらった。徐々に範囲を狭め本音に近いと思われるところまで語ってもらうことが出来たことで、各個人の人物像を浮かびあがらせることに近づけたと感じている。そのことから、本人たちが生涯学習だと感じていなくてもいままでの学びを振り返ってもらったことで、その生きざまが現在の生き方にどのように影響を及ぼし、今後につなげる活路となり得るのか考察を試みた。

専業主婦特有の細切れの持ち時間を、いかに有効利用してきたのか、５例を検証する。公民館や女性センター、市の体育館などを使う公の活動にゆったり参加し、自然体で学習を続けているＡさん。Ｂさんは図書館通いを旨とし、地域活動にも積極的に参加しつつ、決めた目標のためには労苦を惜しまないクリエイティブな家族の中でロマンティックな学習に余念がない。超現実的なＣさんは、ぶれることなく自分に合った学びを見つけ出しチャレンジし続けている。嫁として妻として母としての日常を大切にし、静かに読書し整然とした住まいの中で凛として生きるＤさん。地域の中心的存在であるＥさんは、住まいが山間であるため情報源はおのずとテレビとラジオと新聞などマスコミが主となっている。公の機関を利用するには地理的に不利であるが、めげずに向上心を持ち続けている。最近居ながらにして異文化に接する機会を得、そこから波及する学習を見つけ出したようである。

以上、事例の５人はいずれも生涯学習などと構えることなく、また深く考えることもなく、みんなそれぞれに好奇心を持って、生活に即した学習を積み重ね、今日の自分に巡り会えることが出来たのである。彼女たちはそれほど変化に富んだ生活をしているわけではない。その時どきの生活を無難にやりすごし、未来に繋がる今日を自信をを持って生きていると言えるのではないだろうか。

このことは、４０年以上前に同じ短大で良妻賢母になるために学んだという事実が、現

在の彼女たちの生活に活かされているととらえるべきであろう。事例以外のメンバー達も異口同音に、楽しく充実した日々を送っていると答えている。もちろん老後の算段もほぼ出来ているようである。巷の団塊の世代への不評をもろともせず、個として自立している彼女たちの頼もしさに感服である。皆しっかりと地に足をつけ、それぞれの立場で自らを発揮しながら生きている団塊の世代の専業主婦なのである。

激変する世情の中で、これからいったい何が重要になっていくのか、未知の部分が多いだけに想像以上の未来が開けるかもしれない。これまで６０余年の間に積み上げてきた経験と知識を活かし、諸事に対応可能な人となる努力を惜しんではならない。それは、生涯にわたって学習を怠ってはならないということでもある。立派に老いる必要にせまられているということでもあるのだから。

団塊の世代の専業主婦すべてが同じように生きて、同じように一生を終えなければならないことはない。人生いろいろ、老後もいろいろ、それぞれが自分色に輝き自分の生きる道を確信することが出来れば活路は開ける。今を生きている団塊世代の専業主婦は、これからも命果てるまで自分を信じて楽しむことで活路を見いだしていくに違いない。「ろくまる会」という短大同窓生の小さな集まりを事例とした私の研究は、つまり、人生の楽しみ方にせまったものであったとも言える。とりたてて簡潔な結論とならなかったのは、もちろん私自身の力量不足であったことは否めないが、現在進行形の“かたまり”の行方は暗いものであってはならないと強く思う。

もう６０回も桜の花を観て、その美しさに酔いしれることができたのだから、これからも感動しよう、前向きに生きよう散るその日までなどと呼びかけている私である。

2010/03/03